博士学位論文要旨

濱田　明日郎

論文題目：**後期ベルクソン哲学における発生の問題**

本論文は、『創造的進化』（1907 年、以下『進化』と略記）と『道徳と宗教の二源泉』（1932 年、以下『二源泉』と略記）を中心とするアンリ・ベルクソンの後期の諸著作に対して、〈発生〉の問題という通底するテーマを見出し、後期ベルクソン哲学について一貫した理解を与えることを目的とする。

本論序章では、本論の研究の背景・研究主題・研究のアプローチについて論じる。ベルクソン哲学はこれまで、一方では「持続の哲学」といった統一的なスキームのもとでその哲学全体を単純化された仕方で理解し、他方では特定の著作や特定のトピックにおいて限定的に評価する傾向が否めなかった。しかし本論はこうした研究状況を問題視し、時期区分が見出されることが稀であるベルクソン哲学の総体に「前期」・「後期」という時期区分を導入し「後期」に固有な哲学的な努力として、〈発生〉の問題への取り組みを見出す。本論の見るところ、〈われわれ〉がどこからきたのかを問う後期ベルクソン哲学の探求は、超越的であるはずの〈われわれ〉の起源を、しかし〈われわれ〉に内在的に探究するという困難な課題への挑戦であった。さらに、この課題に取り組むベルクソンの方法は彼が「心理学」と呼ぶものへの依拠であり、同時代的には低く評価されたこの方針が、〈発生〉の問題を解決に導くための周到な方法論であることが明らかになる。そして本論は、こうした固有な問題に駆動され、固有な方法で実践された後期ベルクソン哲学の読解に際しては、「展開史」というアプローチが後期ベルクソン哲学に適したものであると主張する。

本論第一章は、『進化』がいかなる方法によって「人間種」を所産とした発生論としての創造的進化論を記述していたのかを問題とする。生命進化を論じるこの著作でベルクソンは、進化の「最良の説明」として「心理的解釈」を掲げる。これが先にも言及した「心理学」への依拠であるが、本論第一章は、「人間種」の「意識」から回顧する仕方で生命進化を捉えるこの「心理的解釈」の正当性の検討を課題とする。本論は、「心理的解釈」がわれわれの心理的な回顧をモデルとした一種のアブダクションであり、徹底的目的論が期待する目的論的な必然性を退けつつ、またダーウィニズムが依拠する問題含みの突然変異という「偶然」的説明原理をも退け、生命進化の運動を合理的に探求する方法であることを明らかにする。人間種において発生した「意識」の側から、「心理的解釈」によって生命の起源が探求される限りで、生命の起源は「意識」として立ち現れる。ここには、後期ベルクソン哲学が展開する発生論の基本的な構図となる〈所産と起源の相関的な発生〉が見出される。『進化』は〈われわれ〉の〈発生〉を内在的に論じる方法を「心理学」への依拠に見出し、その後もさらに多様な展開を見せる発生論哲学として出発したのだ。

本論第二章は、このような「心理的解釈」がはじめに導入された『進化』の「人格論」というトポスの通時的な展開を再構成する。本章はこの章で、本邦では未だ論じられることの少ない『進化』と『二源泉』の中間期のテクスト、ギフォード講義「人格性の問題」（1914）を取り扱ったことで、後期ベルクソン哲学の発生論の展開を浮き彫りにする。『進化』においては、〈意識〉という原理＝根源による〈人間種〉の発生論が示されたのだが、その後のギフォード講義「人格性の問題」においては〈意志〉という原理＝根源による〈人格性〉の発生という発生論が示されることになる。「人格性の問題」講義において、ベルクソンの記述は、あたかも進

化の端緒から「人格性」が目的となっていたかのような回顧的な過去のヴィジョンをもたらし、それらを推し進めた意志的な「努力」の存在を認める。そしてその意志的な努力は、さらなる人格性を創造し続けるものとして、〈われわれ〉の使命を開示するものとなるのである。このように、後期ベルクソン哲学が肯定する「創造」という事態をめぐって、ベルクソン的発生論の原理＝根源が、「記憶」から「意志」へと推移していく次第を、本章は明らかにする。

「人格性の問題」講義で提示されている「意志」を原理とした「創造」は、『進化』のように〈自己の連続的創造〉を意味するのではなく、〈他者の連続的創造〉を意味するという点において、『二源泉』の「創造」概念を先取りしている。本論第三章ではこれを受けて、「創造」の原理としてもはや「意志」ではなく「情動」を掲げる『二源泉』において、どのような発生論が展開されているのかを、ベルクソンの宗教論の読解から明らかにする。ベルクソンが最後の主著で依拠する創造の原理である「愛」なる「情動」が、神による存在贈与の働きであるとは、先行研究でも語られていたことだが、本論はとりわけ創造された「愛の対象」のあり方について詳述し、これを「愛」すなわち「神」とは存在論的に区別される「個体性」として規定する。第一章より〈所産と起源の相関的な発生〉という後期ベルクソン哲学の読解格子を提案する本論はここで、神と神の愛の対象たる「個体性」との相関的な愛の関係に着目する。「個体性」のこの地球上での実現とみなされる「神秘家」たちの哲学的寄与は「神は愛であり、愛の対象である」という「二重の愛」に集約されるため、本章の後半部はこの定式の意味画定を課題として設定し、神と神秘家との関係性をさらに解明する。要言すれば、「神秘家」は「神」によって〈個体性〉としての存在に呼び招かれ、「神」および「生命の流れ」とは存在論的に区別される存在となる一方、「神」は「神秘家」にとって、魂全体でもって一致するものでありながら、いまだ神秘的生に入らない「人類」に対する働きかけにおいて、「愛の対象」として指示されるものとなるのだ。

本論第四章では、本論第二章で提示した「意志」のベルクソン哲学と、本論第三章で提示した「情動」のベルクソン哲学という対照を念頭に置きつつ、ベルクソンの道徳論を読解する。本論はまず、ベルクソンの道徳論の基本的な概念装置として知られる「閉じた」／「開いた」の対概念について、前者から後者への移行がどのように捉えられるのかという問題提起を行う。次いで本論は、『二源泉』第一章の議論を追跡しつつ問題の対概念について整理を試み、「社会」を論じるか「魂」を論じるかに応じてこの対概念が二つの解釈（〈集合論的解釈〉と〈志向的解釈〉）を容れることを明らかにする。さらに本論は、『二源泉』のゼノンの逆理解釈をとりあげ、対概念の二義性の由来を追求する。ゼノンの逆理は点 A から点 B への到達という志向的な運動観それ自体が引き起こす意気阻喪、そしてそれによる人類全体への到達不可能性を問題化する議論として登場した。それに対するベルクソンの解答は、結果的に対象へ到達することになるという非志向的で自体的な運動の提示というものであり、この運動概念は「ひたすらな愛」としての「開いた魂」に対応する。この解答は、ゼノンの逆理不動から動への移行という問題をさらに喚起するものだが、この問題に対するベルクソンの応答は、不動から動への移行を果たしうる、〈起動相〉における一回的な跳躍の提示であった。「開いた魂」、「開いた社会」とはそれゆえ、「一つの理想の漸進的な実現」ではない。むしろそうした「理想」概念や、それに対する「漸進的な実現」というアプローチは、行動するものの意気を阻喪するものでさえある。だから、「開いた社会」への移行は、そうした「理想」さえ眼中にないような「ひたすらな愛」、何らかの対象を持たないような「運動」への「跳躍」によって、間接的になされるものであるということになる。このような「閉じた」ものから「開いた」ものへの移行のダイナミズムを明らかにしたことは、『二源泉』の道徳論の一つの功績であると、本論は評価する。

最後に本論第五章では、以上のようなベルクソン的発生論において、「人間」が占める位置とその可能性に

ついて論じた。第四章で論じた「開いた魂」を起動する「跳躍」という契機は、あくまで神秘家に担われるものである。とすると、差し当たり神秘家ではないわれわれ「人間」は、「開いた社会」や「開いた道徳」が実現するためには結局のところ「神秘家」を待つほかないことになる。本論はこのような問題含みの「人間」の位置を明らかにするため、ベルクソンにおける「歴史」という、古典的なトポスに立ち戻った。しばしばベルクソンには「歴史」がないと批判されてきたが、検討の結果、解釈者が期待した〈社会性〉・〈内在性〉・〈主体性〉という三つの要素は、ベルクソンの『二源泉』における「歴史」の概念にも含まれていることがわかった。本論は第四章および第五章で「閉じた」と「開いた」の概念を再検討し、これらの対概念のあいだに「開く」起動相、「再び開く」という再起動の相を見出すことで、ベルクソンの実践的な道徳論の読解可能性を明らかにする。ベルクソンの言う「開いた社会」、そして「人類」は決して到達不可能な理念などではなく、「人類」が「意志」しさえすれば、すぐそこに実現されうるものである。ベルクソンは「人間」のそのような可能性に賭けた。内在的に発生を遡行する哲学的方法としての「心理的解釈」、そのアブダクティヴな遡行において見出される、多様な傾向性を相互浸透的に含む「推進力」の概念、その多岐的な展開——後期ベルクソン哲学が依拠するこれらの発生論的なモデルは、「開いた社会」としての「人類」の発生の可能性を明らかにするものとして結実したのである。

以上の行論を経て本論は、〈発生〉の問題を原理的かつ経験的に論じてきた後期ベルクソン哲学を再構成することで、時には不当な扱いを受けてきた議論——「心理的解釈」という方法、「人間」の位置、「意志」の役割、「開いた」ものへの移行、これら全てにまとわりつく目的論的記述——の多くを読解可能なものとした結果、この哲学者が残した後期のテクストのポテンシャルを高く評価する。ありうる具体的な展開として、解釈学や現象学といった隣接する哲学分野とのクロスリーディングの可能性、発生論としてのベルクソン哲学が例えば「道徳的進歩」にまつわる現代的な議論における参照項となる可能性を、本論は終章で示唆する。